

# 微笑みの秘密

望月俊弘



## 微笑の秘密

---

レオナルド＝ダ＝ビンチ作『モナリザ』。

あまりにも有名なこの絵画には、呪われた秘密がある。

現在ルーブル美術館にあるのは、モナリザを対象として、二回目にダビンチが描いたもの。

一回目の絵は、日本にあるという。

こちらの絵画には、血も凍るエピソードが秘められている。宿命を帯びているのだった。

モナリザは、自分と同じく持種である天才という人種に惹かれ、レオナルドを愛していった。

ダビンチは、ルネッサンス期を、美術家、科学者、技術家として駆け抜けた大天才である。好奇心旺盛のレオナルドも、科学技術の可能性の追求の為にも魔術には人並はずれた興味があり、魔女であるモナリザを偏見無く愛していった。当時ダビンチは、国の王に大変気に入られており、貴族の娘との縁談は絶えなかった。しかし、モナリザしか見えないレオナルドは、全て迷いもせず断わり続けた。そして変わらぬ愛を誓う二人。

自分だけを見てくれるこの人の子供を産みたいと、モナリザは切に願った。

ある夜――幸せをぶったぎる様に、モナリザは、両足をぶったぎられた。――魔女狩りであった。貴族階級のやらかした事件である。

「卑しい女がっ！ これでホウキに乗って飛べまい。レオナルド＝ダ＝ビンチともこれからは――んぐっ」もう一人の男が余計な事を言った若者の口を塞いだ。「ちっ。こいつは火事に見せかけるのが万全だな。――お前が火を点けろ。魔女を殺すと呪われるらしいからな」

火の手はたちまち広がり、パチパチとはぜる柱が、モナリザの足が置いてある床にドシンと重く落ちる。じゅううっ。肉の焼ける匂いがした。

モナリザは、レオナルドの子を孕んでいた。

「私とレオの赤ちゃん……」

モナリザは鬼の形相で這いつくばるだけ。

服に火が焼えうつつた。遠のく意識の中で、大好きな人の自分を呼ぶ声が、とても小さく聞こえた。

――「時間が無い!!」

意識が戻るなりモナリザは言い出しました。

驚いたレオナルドに、「ちょっと席を外して。どんな事があっても、入っていいって言うまでドアを開けないで。わかった？」と言いました。

ダビンチが外へ出るなり、痛みをこらえるような声が立て続けに聞えてきました。そして、胃酸を最後の一滴まで吐き出しているような、尋常ではないうめき声が聞えてくる。

ダビンチは流石に心配で、ドアを開けた。

奥歯がポロポロとベッドにころがっていた。

それより目を引いたのは、モナリザが、頭の大きな血だらけのカエルを飲み込んでいる光景だった。

「お前、それ？」ダビンチは唸るように言いました。

「私達の赤ちゃんよ。でも未熟児なの。誰の邪魔も無い絵の中で育てたいの。ねえ、レオ、この筆で私を描いて」

血だらけの筆でした。モナリザの骨に体毛が付いた、まじないがかけてある物でした。

「何故俺を残していく。子供ならまたつくればいい」

「ありがとう、レオ。でも……、考えてみてよ、こんなひどい体であなたに抱かれるのが私にとってどんなに辛いのか。それだけじゃないわ。私の子宮は魔女狩りの時、針金で縫われたのよ。それを引き裂いて、赤ちゃんを取り出して――。くっ……」それでも、モナリザの目は決して狂ってはいなかった。その目と見つめ合って二分。モナリザの方から言った。「時間がないの、赤ちゃんの命が。お願いレオ。愛してるわ」さらに六分。「分かった」、とレオナルドはぬぐいきれない涙をぬぐいながら言いました。「描くぞ。――服を着替えて椅子に座ろうか」

――絵は最終段階に至った。残すは顔の表情だけである。

それは、ダビンチにとって、芸術的美の発見であった。母と言う名の鬼の笑みである。世の中をさげすんだ嘲笑と、母の子供への慈愛の微笑みが、波紋の如く重なっているのだ。

この笑顔を鮮明に覚えて描いたのが、世に知れているモナリザであった。

描きおえてからレオナルドは聞く、「一番幸福にしてくれる人の前で初めて生まれるの」次の瞬間、光がモナリザを包んで絵の中へ。

ダビンチは一生独身を通しました――。

――五百年。絵の中では時間がゆっくりだ。

「そろそろじゃない」占いの師の女がモナリザの絵を前に言い、それに無職の男が頷いた。

二人共自分の前世の記憶がある。親になる積りだ。

――つまり、子供を一番幸福に出来るのは、ここでは本当の両親の生れ変わりなのである。

魔女は歯を見せて笑った。顔が実物大にせり出し、赤ん坊が口を裂いて生まれてくる。